

活動報告

常葉保育所 親子デイキャンプ

5月17日、毎年恒例の常葉保育所デイキャンプが行われました。今回はお散歩に加え、昔ながらの遊び道具である『ぶんぶん駒』を親子で作るうという初めての試みを行いました。輪切りにした樫の木に2カ所穴を開けて、ひもを通して出来上がりです。輪切りにする際に上手く真っすぐ切れず、保護者の皆さまも、いろいろと苦勞をされていました。

子どもたちには、自分たちの好きな絵を描いてもらいました。ひもを通し、試してみると、きれいに回るもの、回りにくいものなど、いろいろな『ぶんぶん駒』が出来上がりました。山の中で駒を作り、炊事棟へと移動して昼食のカレーとフルーツポンチを作り、みんな満足そうに食していました。

昨今の玩具など、ほとんどのものは工場によって作られ、お金を出せば買えるものばかりですが、このような自分たちで作ったものは、この世に一つしかありません。大事な思い出としてこれからも大切にしたいと思えます。

宮原小学校 田んぼの学校『代かき』

5月28日、宮原小学校2クラス合同で『代かき』を行いました。代かきは田起こしをした後の土をきれいに砕く目的であること、土をしっかりと踏み固めて、地下に水を逃がさない様にするためであることを伝えました。馬鍬(まが)の使用方も披露し、いざ、子どもたちの実践となりました。初めは、田んぼに抵抗がある子たちがほとんどでしたが、服がガタ色になるにつれ、動きも激しくなっていました。代かき終了時には、全身が泥パックになっており、氷川の浅瀬で全身を洗い流して日程の終了となりました。

昨年に続き、宮原小学校は田んぼの体験を主として行っていきます。一年を通して地元の産業である農業にも目を向けてもらえればと思います。



▲田の草取り



▲代かき開始



▲踏みならすための「かけっこ」

東陽小学校 田んぼの学校

5月14・21・26日の3回、東陽小学校『田んぼの学校』を行いました。一年を通して、田んぼの行程を学ぶ学習の場として立神峡公園の棚田を使用し、田起こしから収穫までを行っています。5月は『田起こし』『初(もみ)まき』『代かき』。どの工程も最初は抵抗があるものの徐々に慣れ、最後には競うほどになっていました。田起こしでは交互に道具を交換しながら、きれいに土を耕し、初まきでは苗床にまんべんなくまいてもらい、代かきでは少ない人数の中、一生懸命に馬鍬(まが)をひき、土を踏みならしていました。1年間しっかり学習してもらい、農業の大変さや、育てる喜びを味わっていただけたらと思います。



▲田起こし



▲初まき



▲代かき

お問い合わせ・お申し込み先
立神峡公園管理組合 ☎62-1543 tategamikyou@yahoo.co.jp (8:30~17:30 火曜定休日)

町民文芸

短歌

野バラ咲き花弁変えて目惑わす
雄花は隣バラの初恋
法道寺 本田 花風

妻殿が不在とあれば晩酌の
コップも少し太目にて飲む
北野津 宮本 末秋

人生を健康で過す日々体操
皆運動に励むフリートレニング
高塚 桑原ゆき代

蝶々のお帰りをささいと言ふやふに
袖に纏わり彼方の空へ
吉本 高橋 澄子

麦笛の遠くに聞こゆ日曜日
我は一人よ心静まる
西野津 古崎スエノ

絵手紙の師に誘われし阿蘇路あり
主は山に何を語りし
南鹿野 尾崎 京子

季節毎異なる花を愛でらるは
四季が移ろう此の国ならで
吉本 橋村 正之

ゆったりと木陰に寝そべる野良猫の
初夏の涼風眼を細し
西野津 古崎 栄子

俳句

何と言う足れる姿ぞ山も吾も
双手合せて讃つばやきぬ
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

途々に顔毀れたる石仏
ある度手合わす散歩の妻は
西上宮 村内 一誠

竹の子が上着脱ぎつつ背伸びする
北野津 宮本 末秋

白ゆりの庭に咲きゆれ薫りよき
高塚 桑原ゆき代

賜はりし天草枇杷は友の味
吉本 高橋 澄子

どくだみの花可憐なり白十字
西野津 古崎スエノ

一人居て心の時間余る部屋
南鹿野 尾崎 京子

紫陽花の梅雨待つたる淡しかな
西野津 古崎 栄子

カーテンの天井に舞ひ梅雨晴間
町 香山菊童子

病癒え旅に出てみる臍月かな
町 香山セソ子

黄砂降る見通しきかぬ世を生き
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

久しぶり会話深めて梅雨晴れ間
桜ヶ丘 吉田 照子

峰青葉今昔つつむ故里の夢
町 田中 澄子

阿蘇涅槃万感こもる緑世界
桜ヶ丘 宮崎トシ子

母の味酢っぱい記憶すべりひゆ
西上宮 村内 一誠

替え歌シリーズ
港町十三番地

吉本 橋村 正之

永い刑期をようやく終えて
やつと出て来た塀の外
晴れて今日から自由な体
酒が飲めるぞ煙草も吸える
あ、懲役十三年よ

到る所に貼られたポスター
指名手配の顔写真
逃がられぬと出頭したが
下りた判決厳しいもので
あ、懲役十三年よ

後ろ見返りや人寄せ付けぬ
高く冷たい石の塀
規則規律に縛られながら
男盛りが空しく過ぎた
あ、懲役十三年よ

絆

法道寺 本田 花風

六〇七年前だった、お寺の用事で出向いていたとき、身内らしき数人が納骨堂の前で集まっている。顔見知りの年長者に「何事ですか」と聞き及ぶと、「弟が亡くなり今日納骨に来ました」と。その彼は小学校の同級生、六十半の別れであった。黙つてうなずくだけの時間であった。後日、友人数人と住まいを訪れ、弔慰と共に幼き折の昔話で彼を忍んだ。帰りしな遅れて玄関に立った私に、奥さんはそっと声をかけ「主人はやさしくい人でした」と思いを伝えるように声をかけた。思いがけない言葉に私は顔を見、頭をさくことしかできなかった。友の車の帰路のひと時は感動で満ちていた。帰宅後、妻にそのことを話した。彼は十分の人生を生きていたのであった。己がその場になった時、そのような言葉を掛けられる人生を送れるか自信はない。平均余命までそう遠くはない。彼とは人間性に違いがあるが、そう生きることに日々精進しよう。

投稿いただきました作品は、短歌・俳句それぞれ一句とします。必要な場合は、ルビを付けてください。また、確認のためお電話することもありますので、連絡先の記入をお願いします。